

# コーチング解体新書

～やる気を引き出す源泉を探る～

その66 「Doing」よりも  
「Being」が部下を育てる



猪俣 恭子  
中央大学文学部卒  
卒業後足利銀行に7年間勤務。窓口業務を経て、人事部研修グループで行内研修の企画・運営および講師を担当。退職後は家業の印刷会社に従事。2004年からはコーチングを用いた社内の人材育成を手掛け、「良質なコミュニケーションが実現されている現場こそがビジネスの成功をうむ」と実感し、2006年 Coaching Press 株式会社を設立、代表取締役として現在に至る。  
国際コーチ連盟プロフェッショナル認定コーチ  
財生涯学習開発財団認定マスターコーチ  
コーチエィCTPクラスコーチ  
米国CCE, Inc. 認定 GCDF-Japan キャリアカウンセラー

この夏のドラマは懐かしいタイトルが目立つ。『ショムニ2013』もそのひとつだ。このドラマの魅力は、なんとといっても主演江角マキコのセリフにある。先日の第1回放送分にもあった。それは「上司の給料には部下を育てる分も入っている」という言葉だ。

ふうむ。果たしてそう思っている「上司」は、世の中にどれくらいいるだろう。

意識して「育て」ようとしなくても、無意識に多くの影響を与えているのが「人」というものである。

特に職場では「上司」が「部下」に与える「影響」はとってとても大きい。それはもう「存在そのもの」と言ってもいいくらいだ。

さて、私なりに目指す「上司」像をイメージした。たくさんの方の先輩方が浮かぶ。Kさんもその一人だ。彼のスタンスから学んだこと、それは「言い訳しないことの美学」である。

あれは、入社して5年目くらいだったろうか。それは目の前で起きた。後輩社員のAさんがKさんに報告をしていた場面だ。

しかし、Kさんは忙しかったのだろう。

書類に目を通し、ぱらぱらとめくりながら検印を続け、「ああ、うんうん。」と相づちはうつもの、その声のトーンは「わかったから、もういいよ。」と、なんとも面倒くさそうな響きだった。

思わずAさんに「大丈夫？」と視線を送った。

彼女は、「Kさんっていつもこう。余裕がないんですよ。しょうがないです。」と舌打ちしつつ、顔をしかめた。

その後、職場に誰もいないのを見計らってKさんに言った。今思えば、何故、それをしたのかわからない。Kさんのためだったのか、新人の気持ちを代弁しようと思ったのか、はたまた自分がスッキリしたいがためだったのか…？ とにかくにも、私はKさんに直訴したのである。

「Kさん、さっきAさんの話をこんなふう聞いていましたよね。ずっと仕事をしながらでした。それも彼女の話が最後まで終わってなかったのに、途中で席

を立って行っちゃいましたよね。あれじゃ、聞いてもらっているっていう感じが全然しません。彼女のほうを見てちゃんと話を聞いてあげてください。」

そのときのKさんの表情や態度はよく覚えていない。

だが、言葉ははっきり覚えている。彼はこう言ったのだ。

「ほんとにその通りだな。わかった。これから気をつけるよ。言ってくれてありがとうな。」

ただ、それだけのやりとりだ。しかし私は思った。さすがKさんだと。

その後、Kさんの態度は確かに変わった。

軽く10歳は下の部下にも申される。が、Kさんは何一つ言い訳をしなかった。そのうえ「言ってくれてありがとうな。」だ。

なぜ、私はあのときKさんに本音を言えたのだろう。いくらこういう性格だからといって、構わず誰にでも要望できるものではない。そもそも信頼していたのだと思う。Kさんだったら「きっとわかってくれる」と。そして、その通り、Kさんは「わかってくれる」人だったのだ。

それから何年だ？ 20年は経っている。当時のKさんの年齢をかなり超えた。今の私はどうなのだろう？ どれくらいKさんのあの「潔さ」に近づいているのだろうか？

部下を育てるのも上司の仕事。だからといって、何をどのようにして育てようか、左脳で考えすぎるなかれ。理屈で考えすぎるなかれ。自分はどんな上司でありたいのか、モデルとする人は誰なのか、部下とどのような関係でありたいのか、そもそも上司とは何をやる人なのか、部下とともに実現したいことは何なのか、上司として部下の前で決して妥協しないことは何なのか。

部下が育つのは、あなたの「Doing」よりも「Being」なのだ、私は思う。



コーチングプレス株式会社

〒336-0021 埼玉県さいたま市南区別所6-17-17-310 電話 048-863-8914 FAX 020-4665-3162

<http://www.coaching-press.com/> (「コーチング解体新書」バックナンバーも掲載中!!)